「エンパワメント」ってなに？

森田 ゆり (エンパワメント・センター主宰)

森田ゆりさんは、1997年から「エンパワメント・センター」を設立し、エンパワメントの視点を日々の実践の中で活かしていくための研修などを数多く行っています。

今から22年前、わたしはアメリカで子どもと女性への暴力を防止する仕事について、エンパワメントという言葉に出会いました。それはわたしにとって衝撃的ともいえる出来事でした。というのは、それまでわたしが主張してきた人間理解、試みてきた生き方や人との関係のあり方など、すべてに底流する思想とも呼ぶべきものが、その言葉に凝縮されていたからです。自分の生き方に名称が与えられた気がしました。

それ以来わたしは、エンパワメントという考え方を広めることを自分のライフワークのひとつとしてきました。わたしを「エンパワメントの語り部」と呼称する人もいます。

そこでこのコーナーでは、語り部として、4回にわたって、エンパワメントにつらなるわたしの物語をみなさんに語ることで、その言葉の意味を理解していただこうと思うのです。

むかしむかし今から20数年前、わたしはジャーナリズムの仕事をやめて、メキシコへ旅にでました。以来、20余年を国外で暮らすことになりました。

高校、大学とわたしは世の中の不正や欺瞞ぎまんにいつも怒っていました。「暴力や戦争を容認する病んだ社会に否!NO!」と言い続けていました。理不尽さを拒否する否定のエネルギーがわたしの生命力の源でした。それが大学を出た頃から、右手に持った否定の心に加えて、左手に肯定の心を持ちたいと思うようになりました。社会の不正に怒り、否定するばかりでなく、世の中、実はど

こまでも美しく、素晴らしい。あふれんばかりの陽光を浴びて、ひまわりの大輪があたりに幸せの笑いを振りまいているような肯定。世界はあるがままでなんと素晴らしいのだろうと思う心。——そんな肯定のエネルギーを、左手にしっかりとつかみたいと熱望するようになりました。

あいた左手にひまわりの肯定をつかむには、日本ではなく、太陽が肌を音立てて焼き焦がすような所、すぐには戻ってこれない遠くて、そして言葉を知らない国へ、行かなければならないと思ったのです。

エンパワメントとは、人は皆生まれながらに様々な素晴らしい力(パワー)を持っているという信念から出発する考え方です。その力の中には、人とつながりたいと思う心、喜びや悲しみを感じる心、自分を癒す力、そして個性という力もあります。わたしという存在は、ただ生きているだけでも、あまりにも尊く素晴らしい存在なのに、成功しなければ、何者かにならなければとの、無言のプレッシャーにわたしたちは背中を押されつづけています。

もっとがんばれ、もっと向上せよと、自分を叱咤激励し続けています。長所も短所もひっくるめて、自分をまるごと受容し肯定すること。これがエンパワメントの考えの出発点です。

メキシコ、グアテマラの旅のいくつかの出会いの中で、しっかり左手につかんだ自分と世界を丸ごと受け入れる肯定の心を、エンパワメントと呼ぶことができるとわたしが知るの、それからしばらく後、アメリカに移ってからのことでした。

そうそう

「『私』のない私—同調と傍観」 (企画:人権啓発ビデオ制作委員会)

VHS/30分/解説書付き/字幕入りも有り

使ってみて!
教材紹介

普段、私たちは、差別はいけないと認識しています。しかし、差別の現実と直面した時に、傍観する、差別に同調するという人が少なくないことも事実です。

このビデオは、人権侵害を防止する社会システムをつくることにも、自分自身の気持ちや考えを率直に表現し、差別をなくすための一歩を踏み出すことを目的にして、参加型研修で活用できるようにつくられています。

第1部 ドラマ構成による問題提起

ある食品会社での出来事。ライバル会社が賞味期限などの不正表示問題などで自滅。営業拡大のチャンス到来と営業部門を強化。一方、営業活動をめぐる部落差別、取引先との関係でおこる不当配転、上司によるセクシュアルハラスメント、製造現場における不正表示問題などが次々と起こる。それに対して、社員が同調・傍観することで、会社はついに破局を迎える。

第2部 CGと資料を使った解説

私たちの暮らしの中には、六曜や清め塩など不合理な慣習が存在している。そして、不合理だと思っても、世間体を気にして受け入れていることが少なくない。また、たとえ不正だと思っても、力関係から、それを受け入れて同調する、見て見ぬふりをするということがある。そのような行動傾向をつくってきた日本の歴史的社会的文化的背景を考えるとともに、それを克服するための社会システムと一人ひとりの生き方、コミュニケーションスキルを学ぶ。